◎菊の解説　　大菊・古典菊・スプレー菊

【大 菊（おおぎく）】

花の直径が18cm 以上のもので、花形によって「厚物」「管物」「広物(ひろもの)」に分類します。厚物は更に「厚物」「厚走り」「大掴み」に分かれます。

◎厚 物（あつもの）

厚　物

□ **厚物（あつもの）**
数百枚の花弁が花芯の中央一点に向けて鱗状に整然と高く盛り上がったものが良い花です。

□ **厚走り（あつばしり）**
厚物の花の下に袋状の真っ直ぐ長い走り弁が放射状に付いたものが良い花で、より大きく見えます。

厚走り

◎管 物（くだもの）

管状の花弁が長く真っ直ぐ伸びて、花弁の先は小さく固く玉巻き状となり、花芯の部分はカップ状か茶筅状になったものが良い花です。
管の大きさで「太管」、「間管」、「細管」に分けます。

管　物

【古典菊（こてんぎく）】

古典菊は、江戸中期に各地の殿様の保護奨励によって地域独特の発展を遂げた菊の総称で、昔の地名で呼ばれています。
（嵯峨菊）・（伊勢菊）・（肥後菊）・（江戸菊）・（美濃菊）・（奥州菊）

嵯峨菊

【スプレー菊】

スプレー菊は、オランダで改良されて日本に里帰りした菊で、花がスプレー放射状に揃って咲くのが特徴です。 近年、日本での改良進歩がめざましく輸出もされています。

スプレー菊

◎菊の歴史

菊を観賞する習慣は平安時代、中国からもたらされました。万葉集(7世紀～8世紀)には現われませんが古今集（905年）あたりから盛んに歌にも詠まれるようになりました。「心あてに折らばやをらむ初霜のおき惑わせる白菊の花（凡河内躬恒 － 小倉百人一首 第29番)」菊の花は今では日本の秋を象徴する花となりましたが、それを決定的づけたのは、鎌倉時代初期に後鳥羽上皇が菊の花の意匠を好み、「菊紋」を天皇家の家紋とした頃であると言われています。また、九州の豪族菊池氏も家紋に「菊花」もしくは「菊葉」を使用しています。その後、江戸時代前期から栽培熱が高まり、育種が進んで多数の品種が生み出され、正徳(1711～15年)頃からは「菊合わせ」と呼ばれる新花の品評がしばしば行なわれました。また江戸、伊勢、京都、熊本などでそれぞれ独自の品種群、系統が現れ、「三段仕立て」などの仕立ての様式やその丹精の仕方なども発達し、菊花壇、菊人形など様々に仕立てられた菊が観賞されました。これらは江戸時代から明治、大正時代にかけて日本独自の発展をした古典園芸植物の1つとして、現在では**「古典菊」**と呼ばれています。全般に花型の変化が極めて顕著であるのが特徴で、「江戸菊」には咲き初めから咲き終りまでの間に、花弁が様々に動いて形を変化させるものがあります。このように発展した日本の菊は幕末には本家の中国に逆輸入されるようになりました。明治時代になると花型の変化よりも大輪を求める傾向が強まり、次第に**「大菊」**が盛んになります。花型は厚物、管物、大掴み、一文字などがあり、花の直径が30センチメートルに達する品種も現れ、現在に至っています。